

## 〔研究ノート〕

## 震災救援の最前線に立った中学生たち（その5）

1925年北但震災における旧制豊岡中学生たちの  
救援奉仕活動の作文記録を発掘して

編著者 深井 純一\*

共同編集者 岸田 秀樹\*\*

本稿は、北但震災時の旧制豊岡中学校生徒による救援奉仕活動を記録した作文のうち、5年生全員の作文を首魁してきた連載の最終回である。本稿前半で作文紹介を終え、最後に編集者による「まとめ」を掲載する。そこでは、まず震災当日からその後の救援奉仕活動を包括的に把握し、注目すべき諸点、すなわち通常は消防団・軍隊・警察・青年団などが担う第一線の活動を生徒たちが多面的に展開している点、中学校が救援奉仕活動の拠点として持続的に機能している点、救援奉仕活動に恩師や保証人に対する敬意、学友や下級生、近隣の人々に対する思いやりが表されている点、関東大震災と対照的に朝鮮人たちとの関係が良好であった点、鳥取高農生による城崎救援、そして生徒たちが震災の観察に基づいてさまざまな問題点と今後の対策を述べている点、を指摘する。

キーワード：救援奉仕活動，被災者救出，消火活動，家財運搬応援，被災者避難先案内（案内板作製と道案内），慰問品配分，朝鮮人，鳥取高農生

## 行動と日誌 福田 善治

一、十一時半、城崎方面からの汽車通学生を（商工補習生も含め）全部集め、引率して一時半に城崎に着いた。城崎全町はその時大部分は燃え尽くして、駅前町家が焼けている真っ黒中。父母の消息を知ろうと欲したが、だれ一人として知る者がなかった。

夜十時まで心当たりの人を捜したが見当たらず、ついに尋ねあぐねて、一組の橋本君の家族の避難船で不安な一夜を明かした。救援の軍艦

が津居山港に来て探照灯で城崎方面を照らした。時々写真班のマグネシウムに目を驚かされ、肝を冷やししながら布団にくるまった。陰惨だった。

二、二十四日 早朝に起き出して、巻脚半を着け、父母を捜しに出た。東奔西走二時間余りして、桃島湖畔の知人宅で抱き合っ

て泣いている父母を発見した。  
母は私の姿を見るや否や、にわかに私にすがり付き、ワッと泣き伏した。「どうしたことですか」と問えば、「糸（女中のこと）とすえ子（私の妹）を死なせた」と泣きじゃくりながら答えた。私は

\* 立命館大学産業社会学部教授

\*\* 立命館大学非常勤講師

涙が止まらなかった。

午後少し心に思い当たることがあったので、大師山にすえ子を捜すために行こうとした。途中すえ子を背負った男に会う。私は狂喜し、すえ子を受け取るとすぐに、両親の所へ飛ぶように帰った。帰ってみれば、すでに父母の影はなかった。近くの人に聞くと、大師山に向かったとのこと、急いで妹を近くの人に預け、父母の後を追った。行けども行けども父母の姿を見ることが出来ず、帰ってみれば、父母は妹を抱いて喜色満面であったのを見た。その夜は近在の消防組の配給したお結びと梅干しで空腹を満たした。

二十五日 愛宕墓地下に掘立小屋を建造した。一日仕事だった。

二十六日 慰問品の配給部に入り、あちこち走り回った。

二十七日 慰問品の配給、木材の運搬などに従事した。

二十八～三十一日 それと同様。

三、五年一組・片岡君が薬品を持って避難民を戸別訪問したこと。

### 感想と覚悟 福田 善治

今回の震災に関して第一に感じたことは、社会生活のありがたさということだった。記憶もまだ生々しい二十三日の夜、両親を捜しあぐねた私は、襲いかかる空腹と寒気のため一歩も歩けなくなって、ベッタリと鉄道線路の上に座り込んでいたのである。

朱に染まって倒れている父、黒焦げの屍となった母、それから妹などのことが嵐のように頭の中を吹きまくった。町の火はまだ消えもせず

に所々青い炎も燃え上って、あたかも焦熱地獄のような光景を現出している。

津居山港に入港した救援の軍艦の照らすサーチライトは、何かの爆発する音に混じって、地獄にでも引き入れられたように物すごい。ぼうぜんとしてこんな情景を凝視していると、誰か肩をたたく者がある。

ふと振り返って見ると、どこか近在の消防手らしい人が、赤ん坊の頭ほどの大きさの握り飯とたくあん・梅干しとを箱にいっぱい持って立っている。「どうです？握り飯は要りませんか？」。その時の飯の甘さ、ありがたさ。恐らく私の一生を通じて、こんなに感謝をもって飯を食うことはなかるうとさえ思われた。

もしこれが今日のように（大きい意味での）社会を嘗まずに、昔の戦国時代のようなものであったなら、その大災厄に乗じて被災国を乗っ取りこそすれ、救援などは思いも寄らぬことだったであろう。

翌日にもなると救護団、復興応援の青年団・〔在郷〕軍人会・軍隊などが次々と到着する。その翌日からはポツポツ慰問の品々が送られて来るようになる。野菜が来る。警官隊が〔列車から〕下車する。全国の同情はこうして私たちの町村に集まったのである。このような現象が起きるのは、人間が社会生活を営んでいるためでなくて何であろう。私はこれまでも社会生活の利益を感じない訳ではなかったが、今回は特にその感を深くしたのである。

そうして彼らは一様にこう言っている。「おゝ憐れな被災者たちよ。天の起こした災害に落胆せず、再び立ってお前の町を復興せよ」と。私たちは周囲の社会人の期待に沿いさえすればよいのである。

### 行動と日誌 福富 弘

一、友人の家訪問。午後、駅通りの倒壊家屋から死人掘り出し。本局付近の他に永井町の家財運び出し。夜は食料運搬。

二、二十四日 一日帰宅。

二十五日 来豊、城崎の友人を訪問。

二十六日から登校して、皆とともに行動。

主に配給。城崎慰問、田結・瀬戸・津居山行き。田結断層見学。

三、赤江・谷垣・西垣・信部・山田彦らの火災現場での家財運び出し。

### 感想と覚悟 福富 弘

今回の震災について第一に感じたことは、豊岡町民の中に利己主義の者が多くあること、不人情の者が多いこと。

第一に、あの大地震によって起きた大火災の時に、本局附近の家財を掘り出しに行ったが、その時火はもはや眼前に迫っているにもかかわらず、何一つ出すことが出来ずにいる人がある。その時火の手から遠い方の者は、家財を出し終えてしまって、その火の迫って困っている人の手伝いをしないのみならず、他の人に手伝いを受けていながら、火の近付いた時にその人の家に〔手伝いに〕行くことを恐れるなど、それらによって利己主義であることが分かる。

第二に、豊岡の中央・主要の地に当たる豊岡町を見るに、火災によって焼け出され、何一つ持たない人が一本の鉛筆を購入しようとしているのに対しても金を取り、そのうえに慰問品の配給の場合、これを無一物の人より先に取るうとする。そして家になんらの損失もないのに、〔被災者と〕同等に取るうとしたようなことが

ある。

また小尾崎以東の町のような場合、被災者へのローソクその他の配給品の分配に対しても、豊岡町と同様に金を取るなどである。こんなことを目にして、私は遠い地から同情を寄せる人がこれを見たならば、どんなに思うであろうと想像する時、本当に慨嘆に堪えない次第である。村部においてもこのような光景を見る。豊岡町民のある者が非常に利己主義であることを深く感じた。

今回の震災に対してかしこくも上は天皇より、知事に至るまで色々の訓辞があり、慰めの言葉を賜った。これらに対してもむやみに泣き悲しんでいる時ではない。進んで復興に従事すべきである。より強くなる決意が必要である。

むやみに怠ける場合でない。各人各々その道に突入すべき覚悟がいる。落ち着いて締まって行く覚悟さえあればよいと思う。

昨日空き缶が入用とされ、これを車で銅像の所へ持って行った。二個以上取ってはいかんとやっているのに、三個、四個持ち帰る人がいて、後には欲しくても入手できない者が多く出た。

こんなことも加えて見れば、その利己主義で他人のことは考えない、ということが明らかに分かる。困れば人の心情が分かる。

### 行動と日誌 北條 政次

一、学校解散後保証人の家に急いで行き、(日用品の)家具を出し、産婦の手伝いをした。その後中町の親類の荷物を荷車で立野に運ぶこと三、四回。それを途中で止め、四年級伊地知君の荷物を五年小田君とともに二回運ぶうちに終わった。直ちに産婦の下に帰った。

その後再び保証人宅の家具を、五年山田君の

援助によって運んだ。また西岡君宅の家具を中但病院の所に運んで後、火事場に行き、寺町立正寺の畳および仏具を運んだ。

夜、中学校に行き、五年生四五名とともに女学校に行き、十一時ころまでいて握り飯を作ってこれを消防隊に運搬した。一時過ぎころ西岡君の所で河本君と三人野宿した。

二、二十四日 中学校校庭に産婦のためにテントを張り、その他雑事を片付けて十一時ころ車で香住<sup>かすみ</sup>に帰った。その後再び衣類を携えて豊岡に来た。

二十五日 中学校に来た。親類の家に行き、また中学校に来た。晩、運動場で慰問袋を配った。

二十六～三十一日 忘れた。その後豊岡に三、四回来た。

三、五年生諸君の活動は目覚ましいものであった。稲垣・河本・福富・上倉君らはずいぶん長くしていた。谷垣君も各方面に働いていた。小田君も十分荷物を運んでいた。山田彦三君も同じ。

### 感想と覚悟 北條 政次

古来但馬は地震を知らない地方、また世の地震学者によっても、地震の安全地帯と称せられていたにもかかわらず、未曾有の大震災が突如として二十三日に襲って来た。そのために町民が慌てふためいたのは、必ずしも町民の罪ではない。

まさに発展しようとする出発点にあったわが豊岡の町も、わずかに、三分足らずの激震のために、その大多数は倒壊・焼失し、修羅<sup>しゅら</sup>の巷<sup>ちまた</sup>〔＝激戦の場所、大混乱の状態の意か〕となってしまう。昨日までは但馬一と誇っていた町

も、わずかの間に焼け野が原と変わってしまった。思えば夢のようなものである。

近ごろ世の人々は口々に文化・文明としきりに叫んでいる。その文化もわずかの地揺ぎのために灰と化せられ、万物の霊長と称している人間さえもその生命を失う。それに比べて畜生と軽蔑されている犬などは、案外平気で戯れているのを見ると、人というものの実際の力の薄弱さが悲しまれる。

関東大震災後わが国の人々は、一般に地震というものに対して常識を持ち、学者も地震について、一斉に研究をするようになって来たと言われているにもかかわらず、但馬地震の震源地の問題について、各自その説を異にしているところを見ると、その学識の浅薄さも思いやられる。

我々はこの際にむやみに悲嘆に暮れるよりも、奮然として協力一致し、全滅した町をより立派にし、より一層繁華にするために努力しなければならない。そのためには従来の家屋も改造しなければならない。あるいは道路も修繕しなければならない。ただむやみに〔地元以〕外〔の〕人に頼るよりは、我々の救済は当然我々の双肩に掛かっているのである。

### 行動と日誌 細田 一夫

一、下宿に帰宅したけれども近寄れないので、学校に引き返した。その後火事場に行き、小一時間荷物の運搬に従事した。身体が病弱なので非常に苦しく、二時ごろ一時間ばかり休憩した。新先生の宅に行きちょっと休み、それ以後下宿も火事のため危険になったので、荷物を運び出した。

夕方学校に行き、それから避難所に帰り休ん

だ。十一時ごろ僕の家から四、五人の者が、僕の安否を<sup>づか</sup>気遣い迎えに来てくれたから、翌日午前二時ごろ汽車に乗って帰った。

二、二十四日 昨夜少しも眠れなかったため、身体が衰弱し休んだ。

二十五日 朝豊岡に下宿・保証人の見舞いに行き、城崎にも行った。

二十六日～三十日 病いと疲れのため、残念ながら手伝いに来ることが出来なかった。

三、一度下宿に帰ってから学校に集まり、先生に引率され火事場に行き、その他幾度も友達の家荷物の運搬、その他の仕事に従事していた。

### 行動と日誌 間狩 廉三

一、地震襲来の時は机の下に避難し、やや静まったところを見計らって運動場に出た。校長の訓話の後、早速帰宅し、家および家族が安全無事であることを確かめ、昼食を済ませて登校した。

直ちに岡野先生の命令により、寄宿舎のポンプの所に行こうとしたが、〔ポンプが〕見当らなかったため、生徒十数名を引率して他の消防組の所に応援に行った。その後火が消しにくいを見て、今度は家具の運搬に従事した。

その後ひとまず学校に帰って一休みし、再び出て浦部・星丸両先生宅に手伝いに行き、その後引き返して校長先生宅を始め河合・長沢先生宅の家具を運搬した。なおその後保証人宅に行き、あいさつを述べて後、家具一切を裏の空地に出した。その後寄宿舎に行き夕食を済ませた後火事場に行った。十時帰宅。

二、二十三日午後十時までに帰って見ると、祖

母が突然にも午後四時ごろ、脳病によって死去したとの知らせに接した。自分は祖母に対して甚だ済まなかったが、これも人のために尽くして死に目に会えなかったのであるからと、せめても自分で慰めた。

祖母の突然の死去のため非常に忙しく、また養蚕中のため人手が足らず、ついに家において家事の手伝いをしていた。豊岡に出て避難民のために努力することも到底出来ず、気ははやっても致し方なく、甚だ残念であった。

三、右に述べたような理由で震災地に出なかったため、二十四日以後のわが校生徒の働きぶりも見ず、わが校生徒が自身を犠牲にして、社会的事業に営々としてよく努力したのを、人々の口から聞いたのみであった。

### 感想と覚悟 間狩 廉三

五月二十三日、突如として北但地方一帯に大地震が発生した。あゝ天命なのであろうか、我々がこれほどまで地震の起こらない地方として、自ら任じていたわが北但にこのような大地震が起ころうとは。

十日余りが過ぎ去った今日、今なお夢のようなその当手を回想すれば、我々は一瞬言いのない感に打たれ、思わず嘆息が漏れるのを抑えることが出来ないのである。

あの地震当時、教室を出ることが出来ずに、やむを得ず机の下に腹ばいになり、今まさに落ちようとして弓状に曲った天井を見つめていた時、さらに影が形に沿うかのように、地震に伴って起こった大火災は、数時間を経ずに千数百戸をひとなめにし、数千万円の富を空しく一本の煙に変えてしまった。

火炎の中を右往左往する避難民の群、親が子

を呼ぶ声、妻が夫を求める叫び声、これらは下は幼子から上は老人に至るまで、恐らく生命ある限り、否あの世において生活するに至る時まで、永久に我々の胸の中にこびりついて、離そうとしても離し得ないことであろう。

しかしながら、我らはむやみに過去の災難の跡を回想して悲嘆に暮れるのみで、将来の考慮を怠るような女々しい考えは一掃すべきである。ぜひとも過去は過去としてこれを葬り、翌日から古いものを一新し、新しく生まれ出た気分をもって、その根底から漸次一步一步と、確実な歩みによって向上し、現在に対処するとともに、一歩進めて将来の基礎を樹立すべきである。

こうすることによって、あの災いも転じて福となり、犠牲となって死んだ四百余の亡霊も成仏する訳である。我らのまさに踏むべき道はただこの一路あるのみ、これを実践することによって、全国の同胞の……（途中中断）

あゝ我らは初めて地震の悲哀を如実になめた訳で、今度の地震によって初めて、その同胞の熱い真情を痛切に感じた。各地から送付された種々の慰問品は、この真情の表れでなくて何であるうか。

同胞の不幸を見てこれに同情するのは、人間として当然ではあるが、その懇切な情を見ては涙が袖をぬらし、どれほど気の弱い男でも思わず両足を踏み締めて発奮努力し、国民のこの厚い情に報いようとするのである。

あゝ私は最後に祈り、願いたい。同じ災厄を受けた国民よ。忠勇果敢な被災者に、あなた方はむやみに過去を悲しむことなく、これを一つの発奮剤として勇往邁進し、上は一天万乗の君〔=天皇〕の憂慮を安心させ申し上げるとともに、下は一般国民の親身になっての同情の気持ちに報いることを。

## 行動と日誌 松宮 五郎

一、当日頭痛で欠席。地震で外に飛び出し、その後家に入り着物を着て、日用品を取り出した。郵便局付近から発火してから、しばらくそれを遠くから眺めていたが、危険と見たので家財道具を立野<sup>たち</sup>に運んだ。その夜は製米所裏の竹やぶに野宿した。

二、二十四・二十五日 同所に野宿。

二十六日午後より小尾崎<sup>こおざき</sup>の和多田方に避難し、二階に荷物を運び、裏に小屋を造って寝た。

二十七・二十八日（午前・午後の二回）中区〔中町？〕の事務所へ手伝いに行き、配給品をもらった。

二十九日雨降りのため二階に移った。

三十・三十一日 朝昼、事務所に手伝いに行った。

三、二十三日における、中学生の行動について、殊更に感ずることなし。

## 感想と覚悟 松宮 五郎

今回の但馬地方の震災は、地震回避地帯として油断していた我々を、恐怖のどん底に陥れた。日夜金に埋もれていた富豪も、日々の生計に苦しんでいた貧者も、何の区別なく一様にこの災害に見舞われた。そして暖衣飽食をむさぼっていた富者も急に食物や着物の欠乏を感じ始め、貧者はますます貧乏のどん底に陥った。

あの震災に見舞われた城崎が、一瞬のうちに見る影もない焦土と化したのは、遊楽の中心となりがちな街が、神の怒りに触れて一むちを受けたとも思えよう。こう考えれば我々は、速やかに怠惰な気分を一掃しなければならない。

この震災によって初めて人の真の心が薄情であることが明白に分かった。私の家の病院が類焼しようとする時も、職員は無責任にも何一つ持ち出さず、自分の家に逃げて行ってしまった。

どのくらい自分の家も心配であったろう。しかし雇われている以上、医療機器は取り出してくれるくらいの責任感はあるべき。殊に病院には私の亡父の写真が掛けてある。その写真を取り出そうとすると、職員のMは「そんなものはよい」と言った。

この言葉は正気で言ったのだろうか。言っただとすれば実に憎むべき言葉だ。長い間私の父から世話を受けているMのどこからそんな言葉が出たのか。震災後も何のあいさつにも来ない。実に畜生同然の卑しい人間だ。Nもそうだ。日常はおべっかばかり使っている者に限って、このような際にはきっと薄情者だ。

院長Eも自分の家は火災を免れ、家はほぼ原形を保って無事であるのに、病院の方は何の手伝いもせず、何のあいさつもせず、どこかへ行ってしまい、手紙一本よこさない。私の父が死ぬ時、家のことについてEにどんなに頼んだか。また並々の関係ではないはずだ。

Eは学問はあっても、心の中は畜生にも劣る。学者必ずしも仁者ならず、これはEのような者を言ったのだろう。私は跡形もない病院とEの家を比較して見る時、実に感慨深いものがあった。平常へつらう人間に限って薄情者だ。これは決して過言ではないと思う。

しかし我々が感泣しなければならないのは、地方からの同情だ。毎日毎日心ある人たちから送られた品物をいただいた時、どんなに嬉しいことだろう。物品の内容に関して人が不平を言っているのを聞く。それは実に間違っている。

どんなつまらぬ物でも、先方の厚意だけは有

り難く受けなければならない。先方にもしこんな災難が降りかかったら、我々は先方にお礼をしなければならない。

今後我々は、たんすにしまっておくような着物なんかは要らない。着つぶすまで新しい着物を作らないようにしたいと思う。

### 行動と日誌 松村 毅男

一、十一時十二分の地震後、直ちにわが家に帰り、家の安否を確かめ、午後六時二十分の下り列車で豊岡に赴き、ポンプの手伝いをし、二十四日午後二時半ころの汽車で帰宅した。

二、二十四日 わが家に引きこもった。

二十五日 学校に行き、学校の手助けをした。

二十六日 江原発九時十二分の汽車で城崎に行き、午後一時ころの臨時列車で帰宅。

二十七・二十八日 学校に行った。

二十九日 わが家に引きこもった。

三十日 江原発九時十二分の汽車で豊岡中学校に行き、十一時四十八分の汽車で帰宅した。

三十一日 わが家に引きこもった。

三、中学の生徒はさすが教育の力あってか、他人に比べて道徳心に欠けていないこと。

### 行動と日誌 松本 正一

一、第一震後、運動場で訓話が終わるとすぐに自宅に帰ろうとして、帰途、倒壊した幼稚園の下敷きの園児を、救い出そうとしているのを手伝う。自宅の母が一人でいるのを心配して、不安の中に帰宅したが、平らにつぶれているの

み。母は幸い無事であるのを見て、付近の知人がどうなっているかを見舞う。（ただし母の勧めによる）程近い郵便局裏手から火炎が上り、火がますます迫るので家具類を持ち出した。午後四時ころになり奥村武夫・森垣佐市両君が来て、家具運搬を助けてくれた。家が完全に焼失した後、小学校庭に行き、命ぜられて五十嵐時計店に行った。京極通りの西岡勝君の家の荷物を運んだ。既に夜となり、家人とともに寒空を仰ぎつつ朝を待った。

二、二十四日 避難場所を定め仮小屋を建てるのに、一日を費やした。

二十五日 学校に来了。命ぜられて避難先案内板を作った。

二十六～三十日 学校に来了、県営繕課に行き、命令伝達役を務めた。

三十一日 午前八時～十時県営繕課の命令伝達役を務め、それ以降城崎町の同級の生徒を訪ねた。

三、震動がひとたび伝わるとともに、自分の家をも忘れて奮闘した者が多いことを聞き、知らないうちに涙を催した。ただその姓名を知らないことを残念に思う。

### 行動と日誌 宮崎 弥壽雄

一、学校を出て駅に行き、谷本氏に会った。それから本町に行き、下宿屋を訪ねたが人影さえなかった。次に豊田・宵田よいた・寺町・駅通りを見つつ、再び有楽館の隣の火事を見た。途中本町において死者二名、重傷者二名に会う。こうして町内の視察を一応済ませて、午後一時ころ徒歩で江原に向かった。途中危うく貧血を起こそうになった。泣くに泣けない。三時ころようやく江原着、五時四十分よひだに列車出発、へどを

吐くこと四回、六時自宅に帰った。十二時ころまで起きていたが、疲れているため、二十四日八時ころまで前後不覚で熟睡した。

二、二十四日 起床後、世間の風聞を聞いた。

二十五・二十六日 無意識に過ごした。

二十七日 豊岡に行った。

二十八日 午前中勉強した。

二十九日 母とともに豊岡・城崎に行った。

三十日 無為に過ごした。

三十一日 登校準備をした。

### 感想と覚悟 宮崎 弥壽雄

今回の大震災については、豊岡・城崎・港村の町民・村民の方々に対して、同情に堪えぬ次第である。各村救援隊の活動に対し感謝する。しかし僕は被災者の一部の人々の思い上がりを嘆く。小中学生の大奮闘を喜ぶ。鉄道省の横暴を恨む。内地および世界各国の同情に感謝する。世間の混雑を考へてみず、面白半分まぐらに震災跡を見物し、一人悦に入る紳士、綺羅きらら〔=衣服の美しさ〕を尽くした令夫人・令嬢の多かったことについて、一寸刻みにしてやっても飽き足らぬほど腹が立った。〔列車の〕車中における警官隊の横暴（一部であるけれども）を恨む。本町永井の奥様方は恥かしいと言って、同情ある震災慰問品をもらいにお出ましにならなかった。こんな奴らに同情は絶対に禁物だ。人非人！大森博士の学識を疑う。大部分の人が余りに個人主義に傾いているのを恨む。（反対の意見があるかも知れないが...）火災保険会社の自覚を促す。（思い付いたまま）〔今後の覚悟〕

絶対に枕まくらを高くして落ち着き払うべからず。



家財道具にのみ金を注がないこと。ぜひとも銀行に預けておくのが良い。

落胆せず伸びて行くべし。

泣くのを止めよ。そして強者であれ。百尺竿頭〔＝ギリギリの所まで行った上に更に向上して〕一歩を進めよ。強者でありたいと欲するならば、大きな希望を持つべきである。

「我々はぜひとも現代を超越すべし」と、高山博士は言われた。誠にその通り。災害に遭った人々はぜひとも「地震」を超越しなければならぬ。

小野道風は、蛙がしだれ柳に飛びついては落ち、また飛びついては落ち、幾度もこれを繰り返してついに柳の一端に飛び付くことが出来て、段々と上に登って行くのを見て発奮した。水害と地震と火災とに見舞われた豊岡・城崎その他の地域の人々は、一刻も早く柳の一端に飛び付くことを要する。

取るに足りない小アリもついに身に余るほどの大塔を造る。自然に対して弱い人間も、ついにより以上の立派な町を建設するであらう。

自然はあらゆるものを破壊するけれども、人の魂まで威勢をもって服従させることは出来まいと思う。

人生は不安の塊である。けれども我らはこの不安の中から楽土〔＝安らかに過ごせる理想的な環境〕を得ようと、努力せねばならない。

涙なければ人間としての価値はない。しかし余りに涙のある者は、弱者の仲間に入る。

不可抗力的な天災に対してむやみに嘆くのを止めよ。泣くのは自然に屈服することを意味する。ぜひとも自然の横暴に対して、大いに反抗心を奮い起こすべきである。

死は天の命令である。むやみに死者を悼むなかれ。生存しているあらゆる者を愛せよ。死者を悼むのはまるで太陽・水流を呼び返そうとするばかなことに似ている。それは人の気力を忘れて無くさせる。(思い付いたまま)

### 行動と日誌 村尾 道夫

一、地震とともに現場へ駆け付けて、本町の川合〔or 河合?〕先生の前のつぶれた家の下に埋もれている人を二人、小学生・警官とともに掘り出し、小学校に運んだ。それより表崎先生とともに駅通りへ来て、変死者を小学校へ運んだ。

それから火事場へ下級生十名ばかりを連れてポンプを手伝いに行き、次に横町方面の家財を運び出した。四時に一度帰宅し、六時になって父とともに保証人・知人を訪ねた。帰りは早朝四時だった。

二、二十四日 中学校に来て、案内および小学校の慰問品分けをした。

二十五・二十六日 前日と同じ。中学で避難者の名簿を作って張り出した。

二十七日 村本先生と同級生の所を訪問し、午後は小学校で慰問品分けをした。

二十八日 朝から浄土宗知恩院救護班および慰問班に加わって、大いに救護慰問に努めた。

二十九・三十日 また城崎に知恩院の法要の〔宣伝〕ピラ張りに行った。

三十一日 本日も同上。午後城崎方面に救護のため、知恩院救護班とともに出動した。

三、五年級および寄宿舎生諸君は、よく中学生としての本当の気迫を堂々と発揮して、実に喜

ばしかった。林田君なんかよく働いたことに、私は思わず感心した。

### 行動と日誌 村田 三郎

一、運動場で校長先生の訓示を受けてから、すぐ保証人と昨年の下宿屋とを訪問した。家族・家屋ともに無事であったので、また学校に引き返して、荷物（教科書）を包むために教室に入った。

その後、震源地は但馬にあるようなことはない、きっと太平洋沿岸にあるだろう、そうすれば八鹿はまだ豊岡より震害が大きいに違いないと思ひ、急いで豊岡駅に向かった。

しかし汽車が不通だという訳で、級友が鉄道線路伝いに帰って行くのを山王山の南側で見たので、刑務所の所からそれらの一行に加わって八鹿へと急いだ。ちょうど一時間半くらい掛かって江原駅に着いた。

ここで南方に何ら被害のないことを知り、帰って来たことをつらつら後悔した。

その時駅員・医者・看護婦らに乗せた救援列車が来たので、帰りが遅くなることを家族に伝言するよう友人に頼んで、その列車に乗ろうとしたが、救援列車であるため一般乗客を乗せず、しかられてその列車に乗ることを止めた。その後午後四時に帰宅した。

帰宅後しばらくして、豊岡地方大火災との情報を得たので、応援消防隊とともに自転車で現場に赴くことを主張して、病床の叔父にしかられ、また思い止まった。叔父の態度が不愉快でその夜は九時ごろ寝てしまった。

二、二十四日 早朝起きて、八鹿発午前六時四十分の列車の後尾に、ぶら下がるようにして豊岡に赴き、直ちに親類と保証人の

家に行ったが、全く焼失して家族の避難所も不明だったので、直ちに当中学校に来て避難民の救護に努めて、午後八時過ぎ豊岡発の列車で帰宅した。

二十五日 登校して手伝った。午後六時発の列車で帰った。

二十六日 慰問のため城崎に赴き、片岡・橋本・稲田の三学友に会い、その後帰宅途中玄武洞を視察した。午後六時に帰った。

二十七日～三十日 午前六時または八時八鹿発の列車で来豊。県営繕課および当中学で救援事業を手伝った。二十七日か二十八日には、営繕課の仕事が非常に遅くなったので寄宿舎に泊まった。

### 行動と日誌 森本 正雄

一、二十三日当時、僕は病氣静養のため毎日適度の運動を行い、その日その日を送っていた。当日朝飯が済むとともに魚釣りに出掛けた。朝から何となく太陽の色は普段とは異なって、また蒸し暑いこと限りなかった。

魚が二、三匹掛かったと思うころ、後ろの土手の竹やぶの土や石がガラガラと崩れかけた。時折ゴーッというすさまじい物音を地下に聞き、驚いて大急ぎで家へ帰ると、いま大地震があったということであった。それから余震を怖れて、鉄道線路の土手の斜面に避難して一日を送った。

二、二十四日 鉄道線路の斜面にテントを張り、避難した。しかし二十八日以後大した余震がなく、家業を手伝った。こうして三十一日まで過ごした。

三、新聞紙上で読んだ本校生徒の目覚しい働き

に、感激しないではいられない。

四、十年あるいは百年後の今日、また地震が起こるかも知れず、不安の思いが胸を覆った。油断大敵、今後の建物は耐震性を考慮して、建築すべし。

### 感想と覚悟 森本 正雄

いまだかつて大地震に遭遇せず、昔から唯一の安全地帯として知られた但馬は、大地がひとたび怒ると、その有名な都会豊岡・城崎両町はまるで焦土と化した。

この日陽気が悪く、たいへん蒸し暑かった。そしてちょうど正午、昼食の支度に多忙を極め、家屋の倒壊とともに火災を伴った。それによって猛火たちまち家屋をなめ、これを焼失させ黒煙は天に真っすぐ高く上った。死傷者が何人か、その損害がどれほどかを知らず。

現場は一段と凄惨<sup>せいさん</sup>を極め、その状態は表す言葉がない。五月の薄ら寒い、寂しい豊岡の地に立てば、地は泣き空は黒くて墨かと疑われ、幾人かの精霊は魂となり、天に向かって声をあげて泣き、はるかに遠隔の異郷を放浪する旅を続ける。どこからか、スツと血生臭い風が頬<sup>ほほ</sup>をかすめて吹く。

しかし目覚めよ！人力が足りないのをむやみに嘆いてはならない、我々は和魂の所有者ではないか。破壊はやがて建設の一步となるのだ。見よ！関東の大震災後の人々を。我々は大胆・堅実・質朴・勇猛な精神をもって、但馬第一の都 以前の豊岡にも勝る新豊岡市を建設すべき義務があるのではないか。急げ復興を。精神一到何事か成らざらんや〔心をこめて一生懸命にすれば、どんなことでも出来ないことがあるうか〕。

### 行動と日誌 山田 彦三

一、郷里・香住<sup>かすみ</sup>の津波が気になってならなかった。解散後直ちに香住駅から通学する下級生と一緒にひとまず豊岡駅に行ってみたが、もちろん汽車は不通である。鉄道電話によると、郷里は大したことはないそうであった。頼りにするには余りに頼りなかったが、皆を慰めて一緒にひとまず安心した。

駅で郷里の人数人に会ったので、通学生は大丈夫であることを伝えておいた。実は自分は郷里で父母が、自分らのことをさぞ心配しているだろうと思って、それを恐れていたから、だれかにでも言っておけば、その言葉が何とかして郷里の父母たちに届くことを願っていた。

徒歩によってでも帰ろうと思ったが、何分二十人近い者が食糧も持たず、それに加えて年のまだ小さい一年生が十四、五人もいるので、その子らが十二～三里も歩き通せるかどうかを恐れた。自分は歩いてでも帰りたかったが、偶然にもその郷里に帰る人たちがいたので、〔伝言のみ託して〕自分らは今晚はこちらで夜を明かすことにした。

夕方になったなら中学校の運動場に行っているように、四年の山田孝に後を頼んで、自分は数人の友達の家または下宿の家具を持ち出しに行き、晩八時ころ運動場に来てみた。

やっと捜し当てて、皆と一緒にいるのが嬉しかった。しかし布団もゴザも持たないで、ただ地面の上に寝転んでいて、夜になって風邪を引くの恐れだったので、布団を借りて来て皆にかぶせてやった。

また町に出て行き夜十時半ごろ帰って来て一眠りし、皆と一緒に朝五時ころ起きて寄宿舎で握り飯をもらって、駅に行き六時十五分発の汽

車で香住に帰った。全員無事帰宅が自分にとって最も嬉しいことであった。

二、二十四日 家の煙突が壊れて、屋根やその下が破損しているのを片付けた。

二十五日 母と一緒に豊岡に来て、父の友人の家に慰問に来た。

二十六日 自分の最も好きな百姓仕事をした。

二十七日 登校して、友人の所に慰問に行った。

二十八～三十日 家で、好きな百姓仕事をしていた。

三、四年の山田孝君が、自分の頼んだことをよく聞いてくれて、同じ香住駅から通学する下級生を指揮してしてくれたこと。上倉・河本・西垣・松本・信部らの諸君の働きぶり。ここで少し書きたいこともあるが、宿題の方〔をやること〕にする。

### 感想と覚悟 山田 彦三

無震地帯と言われ、またそう認められたこの但馬の地に〔突発した〕この激震は……、またこの多くの死傷者は何を意味するか。科学全盛の今日、科学あってかえって身を滅ぼすものがある。自然に帰れ！昔を慕え！

家は焼かれ、子供に死なれ、着の身着のまま、やっと命を拾った避難者が寂しい気持ちで、山や野の小さい破れ小屋で寝起きしているのこそ、それが本当の生活ではなからうか。しかしまだ今人は弱すぎる。昔の人はこのような境遇にいて満足し、自ら鳥獣などを捕らえて食べたのだ。何と貴いことではないか。何と愉快なことではないか。芭蕉も一生自然に親しんだ。

今人は余りに自然を見ない。朝に月を頂い

て家を出で、夕に星を踏んで帰る百姓の生活こそ本当のものである。それなのに今は百姓を嫌う。のみならず、あの貴い百姓をけなす者すらいる。

田に働く人は家が倒れて死ぬ心配も要らない。人の頭が進むにつれて、だんだん矛盾したことを思っている。あの震災の際、家が倒れぬように、焼けぬようにと願わない者はなかっただろう。しかしその家は倒れやすいように建て、また焼けやすいものを多く集めているではないか。

### 行動と日誌 山田 芳英

一、まず無事で運動場に集合。それから下宿屋に帰り、裏で火事を見ながら弁当を食った。それから下宿屋の荷物を畳も何もかも、避病舎〔伝染病患者を隔離する病舎〕の前の埋め立て地まで運んだ。それから自分の荷物は屋根から投げ下ろして、上倉・山田彦三両君に運んでもらった。自分の荷物を出した時、二階でけいれんが起きて死ぬかと思った。荷物を避難所まで運んでしまったころには、足が立たないくらいに疲れた。次に隣の家の荷物を少し運んだ。夜は空を見ながら、ほとんど一睡もせずに一夜を明かした。

二、二十四日 午後二時、関宮村の叔父が来て、無理にその家に行かされた。ここで二十九日まで地震に脅かされ、新聞を見、何していたか知らぬ間に過ぎた。

二十九年 午後一時に帰宅。そして三十一日豊岡に来たが、宿なしで大いに困難を来した。寄宿舎に一泊。

三、朝鮮人の活動は大いに見る所があった。

## 感想と覚悟 山田 芳英

天の戒めか神意か、大正一四年の春も暮れ、青葉滴る初夏の五月二十三日、突如として襲来した大地震は、但馬第一の都として誇る豊岡、世に城崎温泉ありと有名な城崎を中心として、附近一帯を焦土と化した。悲惨と言うも愚かである。痛恨と言っても尽くさない。

あゝわが数百の人々に何の罪があるか。崩れる家屋の下敷きとなった者、家に圧せられて出るに出不らず、救いを求める間にその家とともに焼かれた者、逃げ出したものの落ちる瓦に打たれ、猛火に巻かれて死んだ者も多かるう。こうして一日のうちに、天下の美女を集めた歌舞の街も〔焼け尽くされ〕、今は焼死体の異臭が四方に立ち込めるばかりだ。

一昨年の関東大震災は未だ我々の印象の新しいところであるが、この山陰の一角に震災が襲来するとは誰が予想したか。あの光景、あの惨状、夢かと疑ったが夢でも幻でもない。

天の戒めにしる神意にしる、余りに無惨ないたずらではないか。文学者は筆を振るって人を泣かせるが、しかし自分で泣く者は少なかるう。世を嘆きはかなむ者の多くは、その苦い経験を腹の中にしまっている。悲惨だ、痛恨だと言うことは、とても筆で記すことは出来ない。

しかしいつまでも嘆くことは不必要だ。この身体、この青春に燃える精神をもって、復興の歩みを進めるべきだ。

わが国は維新以来、国民は国外に〔おいて〕戦ったけれども、国内は大平に慣れて文弱〔＝学問・芸術にばかりふける〕・驕慢〔＝おごりたかぶる〕・浮華・軽佻〔＝軽はずみ、浅はか〕となり、生まれながらに財産を擁する者はぜいたくにふけた。

祖先の残していった事業も知らず、国家を無視した者は、ひとたび一昨年の関東大震災に遭い、目覚めつつあるけれども、都を離れた遠方の地方は未だ覚めず。ここに至って初めて尊いむちを受けたのである。

今を記念にして真面目に自己の本分を尽くし、前以上の大但馬を建設することが、我々の天職ではあるまいか。

## 行動と日誌 山田 迪薫

一、学校を退いてから直ちに下宿(保証人宅)に帰り、家族の避難所を訪ね、自分が安全であることを知らせた。直ちに小学校方面に引き返し、有楽館の横の家より出火したのを防ぐために、そこの道具を運び出した。

またポンプのホースから水が漏出する所が多かったので、近くの家から布を引き出し、穴を詰めるのに努めたために服はずぶぬれ。その時に四年の某もともにそれに努力しつつあったのを知った。それから小学校庭を過ぎて宵田に出たが、別にすべきことがなかったので駅方面に行き、再び下宿に引き返した。

下宿は寺だったので、そこの僧侶の頼みにより、倒壊しかけた危ない本堂に入り、阿弥陀像を出した。仏像に手を触れた瞬間に第三番目の強震が来た。本堂に突然大きな響きが起こった時には全く夢中で、仏像を左手に引っ下げて飛び出した。後で思うたびにぞっとせざるを得ない。

そのうちに郵便局の方面で、燃焼している様子があったので直ちに行き、隣家の道具を運び出し、またホースの筒口を持って隣の家の軒などにぶっ掛けた。その時に四年の川口とか言う生徒の奮闘しているのを見てほめた。しかし余

りの空腹に耐えられなかったので、帰って昼食をとった。時に午後二時過ぎ。

それから火事場の近くを巡回、後に火の手が次第に徳證寺しやうの近くに迫って来たので、一同（家族の者）寺の道具を裏の広場に運び出した。その後、火の手が駅通りまで広がった時、有楽館・電気会社の辺りで、消防夫に混ざって消火ポンプを運転した。（行動の順序は後先の誤りあり）

その以前に燃焼しつつある新屋敷の倒壊家屋の消火に努め、徳證寺近傍の数軒は火災を免れた。夜、寺の道具を小屋の中に詰め込み、疲れ甚だしかった。

#### 感想と覚悟 山田 迪董

人々が進歩へ進歩へと歩んでいる間にも、自然は破滅へ破滅へと、その反逆の手を緩めていなかった。そうして一挙に、より多くの破滅をもたらすべき機会を狙っていた。五月二十三日午前十一時十分！それはまさしく反逆者が狙っていた「時」であった。その日、多くの人々は倒れた。その夜のうちに大きな破滅が地上に横たわった。

豊岡はただ一本の縄によって宙に釣り下げられている運命にあった。そうしてだれかがある日その運命の縄をぶった切った。しかしその縄を切った者を、真に知ってる者はない。

人という者は平生幾ら上手に外面を繕っていても、不意に何かの事変に直面した時には、訳なく自分の本当の姿をさらけ出すものだ。決して覆い隠せるものではない。それも思わずそうなると言うよりも、むしろ自分ではそうと気付いていながらも、ひとりで引きずられて行くものである。自分は今度の震災において痛切に

それを感じた。（努力の裏面）

炎々と燃え上がる炎は、今や次の家をもなめようとしていた。その炎の中に、高い声でわめきながら防火に奮闘する人があった。その男はこのような危急の場合に、余りにのんきだと思われる人々をしかり付けていた。自分はその光景を見て、一種崇高な感に打たれずにはいられなかった。しかしながら、最後に私は知った、その炎に包まれた家が、その勇敢な男の家であったことを。

震災の日、天から多くの運命の矢が人々の上に降って来た。それは明らかなことであった。なぜならば、難を逃れようとして死んだ人もあれば、死を覚悟しながら生き残った人もあるからである。

偶然に生き残った人々は、その偶然に非常に重大な意味を付けている（もう一步進んでいたら、死んでいたかも知れない）。自分はそれら色々に意味づけられる偶然が、彼らの言うほどまでも特殊の意味を持つてはいないと思う。それは平生のリズムと変わりのない、平々凡々の当たり前のことである。しかしながら一步踏み込んで考えると、それら偶然の一つ一つが、尊い生命の一つ一つに重大な意味のあることを知る。

家屋の倒壊した人は、家屋の完全な人をうらやんでいるが、自分よりもまだ惨めな、焼け出されて家のない人々のいることを忘れていた。彼らはより以上の満足のみを望んでいた。飽くことのない欲望。決して完全に満たされることのない欲望のために、憐れな人々は悩み続けている。自分は毎日バラック村の配給品の分配を見ていて、そのことを知っている。もし彼らがより憐れな人々を熟視すれば、それらの欲望は捨て得るであろうに。

強い信念の下に動く人々に、出来ない何があるろう。今度の震災でキリスト教の救世軍、天理教徒、その他多くの宗教活動がそれを証明している。現在の豊岡は雄々しく闘う人を要求している。

以上何の順序もなく感じたままを並べたに過ぎない。

### 行動と日誌 米田 孝夫

一、十一時十分に飛び出た我々は直ちに運動場に集合、訓辞を受けて解散した後、直ちに下宿屋に帰って、その家および家族・隣家の安否を伺ってその無事を確かめ、その足で直ちに市内にある知人の安否を伺った。

郷里および他の親類に、市中の状態と私の無事避難した旨を伝えようと、郵便局およびその他の通信機をもつ知人の所をすべて回ってみたけれども、目的を達することが出来なかった。やむなく時機〔到来〕を待った。

この時早くも有楽館の横手・駅通りで出火した。直ちに消防手によって消火された。万一の危険を免れるために、一時的な避難地として下宿屋の裏手広間を借りて、少しの間休んだ。郵便局方面より出火した火が猛烈で、知人もいるため、至急火元に行って知人・他人を問わず、頼まれるがままに被災者の家財を運搬した。

多少疲労を感じたけれども猛烈な火は下宿屋に迫ろうとするため、帰りに家財の運搬をした。私の身を心配して八鹿より来た父も運搬を手伝った。夕方になって災難地と避難地の状況を視察し、夜八時二十分の列車で郷里に避難した。

二、二十四日 朝、当地方の親類・知人の安否を伺いに自転車<sup>ようか</sup>で八鹿から惨害地に来、て避難者の知人を訪ね、夕方帰郷。

二十五日 兄の惨害地見舞いの案内をするため来豊、夕方帰郷。

二十六～三十一日 郷里において家業に従事。

三十一日 夕方帰校、惨地を見た。

三、なし。

### 感想と覚悟 米田 孝夫

五月二十三日午前十一時十分！それは我々はもちろん、わが国民の忘れることの出来ない永久の大記念の日である。全国民がこぞって「地震のない但馬」とまで語ってきたこの地方において、この日大激震が襲来し、加えて大火災が発生し、人畜家財の大多数を奪った。だれがこの大惨事を一瞬前に予想したであろうか。

思えば思うだけ、その惨事〔の光景〕が目前に広がる。全新聞は先を争って惨状を取材し、紙面全体を覆う大活字で、その風説のままを報じている。しかしこれを読んでその惨状を知る彼らには、その記事と実際の惨状とは、はるかに隔たっているだろう。

その惨状を被りつつも、悠然として驚きの色も見せず、過去を忘れて復興の気が充満し、続々と集まる全国各地の同情に感謝し、これに懲りずに復興に従事する。こうした性格が我々国民にあるのは本当に喜ばしいことで、国民のみならず、外国の津々浦々までも感激している。

この大天変地異は多数の英霊と家財を襲って行った。その跡は惨たんたる広漠とした一大焼け野原と化して、その惨状を〔直視し得ず〕、思わず立ち去ってしまった。

こうして受けた我々の大被害はどれほどであろうか。どのようにしてこの被害損害を取り返すことが出来るか。もちろん天然に受けたこの

被害はどうすることも出来ない。ただ同胞の各々の同情による手厚い救援によって復興するのみ。今後幾年を待てば過去に劣らないこの大但馬が生ずるか、期待してやまないところである。

もしこのような天然の惨状がなかったならば、どれほど幸福であろうか。過去の姿に追いつくまでに、どのようにして偉大な大但馬が生じ得ることだろうか。例外があったにしても、一刻も早くその惨状が把握され得れば、どれほど幸福であろうか！

こうなった以上は、上は下を指導し、下は上に従って、全住民一致協力して復興を急ぎ、過去に勝る大但馬を建設し、もってこの大天変の犠牲となった同胞の英霊を慰め、我々被災者に手厚い同情を寄せた心の深い同情者に対して、御恩の幾百万分の一でも感謝の意を表さねばならない。

## あとがき

### 救援活動作文が物語るもの

この連載で紹介した資料は、旧制豊岡中学校生徒596名が文字通り震災救援の最前線に立って活動した上に、その活動記録が当人たちの作文として書き残されていた点で二重に希有であった。このたび現代文に修正した5年生の作文を本論集に掲載する機会を与えられ、2000年12月以来本号で5回に渡る連載を終えるに当たって、注目すべき諸点を概括しておくことにしよう。

連載巻号

（その1） 本論集第36巻第3号，2000年12月

（その2） 本論集第37巻第1号，2001年6月

（その3） 本論集第38巻第1号，2002年6月

（その4） 本論集第38巻第3号，2002年12月

## 1. 教職員と施設を総動員した救援態勢

連載（その2）に掲載した目良校長の報告書に詳細に記されているように、学校当局が震災当日から月末までの9日間、授業を休講して取った救援態勢は学校の持てる人的・物的条件を文字通り総動員したものであった。

とりわけ、地震発生日5月23日の救援奉仕活動は注目に値する。教員と生徒が第一線の活動を担ったのである。しかもその際に、学校側は以下のような細やかな配慮を忘れていない。すなわち、

- （1）自宅通学ないし比較的郷里の近い生徒たちには、まず帰宅して自分の無事を伝え、自宅・実家の安否を確かめて、可能ならば学校に戻って救援活動に参加するように指示していること。
- （2）救援活動は教員の指揮下に集団で行うこと、である。

生徒たちの地震発生日の動きと救援奉仕活動を概括すると、以下のようである。

- 1) 校長の指揮の下、寄宿舎生は救援奉仕活動のため待機し、通学生は帰宅しはじめる。汽車通学生は豊岡駅で汽車不通を知り、一部は徒歩で故郷を目指し、一部は駅前に滞留し、一部は中学校に戻る。
- 2) 中学校では教職員と寄宿舎生、駅から帰った生徒による救援隊が組織され、町内の被災地に向かいはじめる。火災は駅通りの有楽館などに散発的に生じていたものの、消防夫等により消し止められた。救援隊は当初、震動によって倒壊した家屋の下敷きとなった「被災者の救出」や「死傷者の搬



送」に当たっている。幼稚園から園児を救出した者もいる。

- 3) 町北部の郵便局に発生した火災は北風に煽られ、拡大の一途をたどる。この頃になると、一旦帰宅した通学生たちが学校に戻り、救援奉仕活動に加わりはじめる。活動の内容は、ポンプ操作を含む「消火作業」や火事場からの「家財搬出援助」が主となった。老人や傷病者を背負って避難した者もいる。刻々変化する火災状況への対応と疲労の蓄積のため、教員と生徒からなる集団も次第に分散して行ったように見える。
- 4) 夕刻、女学校で炊き出しをして消防団や他の救援部隊、被災者に配ったが(郡役所から中学校にも「炊き出し」の依頼があったようだが、詳細は不明)、何人かの生徒がこの炊き出し、にぎり飯の搬送に関わり、他方、中学校に戻った生徒はそのにぎり飯を夕食にしている。そして、自宅へ帰れる者は帰り、中学校で野宿した者は翌日に帰宅した。

以上の「被災者救出」、「死傷者搬送」、「消火活動」、「家財搬出援助」、「炊き出し」が、<別表>〔救援記事・23日〕項の の内容である。

## 2. 生徒たちの率先・自主的な活動

軍隊・警察や消防などの部隊が到着し始めた24日以降は、より細やかな後衛の諸活動を生徒たちが担い始めた。それには教員の指示が伴った場合が多いようだが、それ以外の場合も少なくなかったようである。

教職員の指示が伴った場合は、目良報告書によると、以下のようなものである。すなわち、

中学校に集まる慰問者の案内、

「被災者避難先案内」の調査作成、掲示

校舎設備の被災調査(博物室の掃除等)、  
救援本部(豊岡小学校)での手伝い、具体的には、慰問品の分配と配達、建材の運搬とバラックの建設支援、  
被災生徒たちへの見舞と被害実態調査、  
地震の調査研究(以上、別表中 印)である。

特に上記の は地元の評価が高く、多くの生徒が作文で成果を自負しているが、その起源は以下の先例に学んだものであろう。

2年前の関東大震災において、東京帝大の末広巖太郎・穂積重遠両教授が率いるセツルメントの学生救護団が、政府公認の「東京罹災者情報局」を設置し、旧制高校・専門学校生徒の応援を得て、30巻の情報原簿を作成して問い合わせに応じたという(『だれが風を見たでしょう・ボランティアの原点・東大セツルメント物語』宮田親平著、平成7〔1995〕年)。当時全国紙でも紹介されたし、本校出身の先輩たちから伝えられていたかも知れない。もちろん仮にそうであっても、豊岡中学校によるこの活動の意義を少しも損ねるものではない。

～ 以外の生徒の活動としては、以下のものが見出された。すなわち、

- 1) 生徒自身が町内の被災者であり、自家の復旧とともに近隣の手伝いをした。
- 2) 城崎の被災者で城崎の役所を拠点として救援奉仕活動を行った。具体的には、慰問品の配達、郵便・小包・電報の配送、傷病者の看護、夜警などである。町内が全焼し、救援体制がほとんど取れなかった城崎では、豊岡にも増して中学生が活躍した。
- 3) 浄土宗知恩院救護隊に加わって救援奉仕活動を行った。
- 4) 親類・知己宅の倒壊、焼失跡の片付け(以



比較的遠方に実家のあると推定される生徒	21		中学									下宿生	
	22		中学									寄宿生	
	23	大阪	中学									寄宿生	
	24		町内									下宿生	
	25	町外	中学									寄宿生	
	26		町内									下宿生	
	27	町外	中学										
	28	香住	町内										
	29		町内										下宿生
	30	江原											下宿生
	31		中学										下宿生
	32	香住	中学										下宿生
	33		町内										下宿生
町内近隣に在住すると推定される生徒	34	八鹿										下宿生	
	35	江原	自宅										
	36	町外	自宅										
	37	江原	自宅										
	38	江原	自宅										
	39	町外	自宅										
	40	町外											
	41		自宅										
	42	町外	自宅										
	43	...村	自宅										
	44	町外	自宅										
	45	町外	自宅										
	46	町外											
	47	江原	自宅										
	48	町外	自宅										浄土宗知恩院教護班
城崎・竹野	49	八鹿											
	50	城崎										城崎で救援奉仕活動	
	51	城崎										城崎で救援奉仕活動	
	52	城崎										城崎で救援奉仕活動	
	53	竹野										徒歩での帰宅強行	
	54	竹野										徒歩での帰宅強行	
	55												
	56												
	57												
	58												
	59												

1. 「救援奉仕活動」を「自分と自分の家族以外の人々の生命・財産の確保するに役立つ活動」と定義した。

2. , , は救援奉仕活動の内容を表す。 は目良報告書に出てくる活動, は出てこない活動を表す。

また寸暇を見つけて各自の保証人宅にも赴いて、安否を伺うとともに荷物運びを手伝っている。高い学費の納入と真面目な勉学を学校に保証してくれる人は、恐らく親類や親の知人だったのであろうが、感謝の念を失っていない。

その他にも自分の下宿や級友宅の荷物とともに、下宿先の大家や近所の荷物を運んでいる。火の手の回り方次第で、手当たり次第に手伝っている。

#### 4. 下級生たちを統率した上級生

恩師や保証人とともに、下級生が上級生を慕い、従う、他方上級生は下級生を守るという先輩後輩のきずなも強固に保たれている。現在で言えば最上級生は高校2年生で、最下級生は中学1年生だからその年齢差は大きい訳であるが、教師に引率されての集団行動でも、その上下関係は統率を保つ上で大いに発揮されたと思われる。

特にそれが目立ったのは、教師の引率が及ばなかった遠距離通学の生徒たちの集団下校であった。5年生たちは中学の下級生のみならず、小学生や商工業実習学校生たちを引率して、列車不通のために徒歩で郷里を目ざし、あるいは帰宅を思い止まって学校に戻る決断をしている。

学校では各種の救援奉仕活動に参加した後、夜は運動場で野宿したが、給食や布団・ござの調達にも、上級生の配慮を届かせている。

城崎に帰った集団の場合は、火勢が強いために町の入り口で一たん待機させて、5年生が町内を視察して状況判断を下して後、解散している。

#### 5. 朝鮮人による救援活動の称賛

関東大震災の際の多数の朝鮮人虐殺事件は、

この地方の少年たちにも鮮明な記憶となって脳裏に刻まれていたのであろう。彼らは豊岡の各地で朝鮮人が進んで取り組んでいた被災者への奉仕を快く受け入れ、鮮人という蔑称は使いながらも、その姿をかなり公平な視点で捕らえ記録している。朝鮮人の側にも悲劇の再来を避けたいという思いがあったのかも知れない。

#### 6. 鳥取高農生たちの救援活動への感謝

詳しくは別稿で紹介する予定であるが、鳥取から城崎へ自主的に出向いた鳥取高等農業学校生たちがいた。かれらの活動を目撃したのは城崎在住の生徒に限られるが、強い感謝の意を表している。逆に、それだけ城崎では救援体制が不十分だったことを示してもいる。

#### 7. 各方面への鋭い批判精神

旧制中学5年＝現在の高校2年生と言えば反抗期のただ中だが、彼らは震災のさなかにも周囲に遠慮のない批判の目を向けている。

- (1) まず授業中に襲来した地震に慌てて、真っ先に教室から逃げ出した教師が見受けられたことを糾弾している。他方火災の迫り来る中で冷静沈着に救援活動を指揮した教師には、強い尊敬のまなざしを向けている。
- (2) 但馬地方が地震の安全地帯だと講演し、教科書にもその説が掲載されてきた著名な地震学者たち、しかも地震後は反省もせずに学説を変更する彼らの無節操に対して憤っている。また地震予知機の不備不足を問題にしている。
- (3) 安全地帯説に安心していたからでもあろうが、住民の多くが地震に関する一般的な知識を持たないために、強い余震が襲

来するという流言飛語に脅えて、火の始末もせずに家から逃げ出して火災の原因を広げたことを嘆いている。

- (4) 耐震性を持たない木造建築や狭い街路、水道の水圧の不足などが、震災被害を大きくしたこと。特に城崎では3階建ての木造旅館が多く、大惨事を招いたことを悲しんでいる。
- (5) 近隣の消防団などの動員をめぐって、豊岡優先で、周辺部が軽視されていると批判している。
- (6) 見舞品を受け取る地元住民の中に、被災者でもない者が混じり、自分は助けてもらいながら人を助けようとしめないなど、復興に真剣に取り組まない不真面目さが目立つと憤慨している。
- (7) 総じて市制を目ざしていた豊岡や、温泉町として名高かった城崎を、郷土の栄誉

として誇らしげに語る生徒が少なくない反面、これまでの繁栄がうわついであり、天の戒めとして震災が起きたと考えている生徒たちが少なくない。本校の生徒たちに関しても悪評判が聞こえていたと認めている。

## 8. 多面的な対策の検討

上記の縦横の批判の後で、それらの改善策の検討も忘れていない。主な点を列挙すれば

- (1) 地震学の発展と地震予知機の全国配備。
- (2) 地震及び火災予防に関する知識の普及。
- (3) 住宅の耐震性強化と街路の拡幅、水圧向上、などであり、その内容には科学を学ぶ生徒たちの問題意識を感じさせてくれるものが多い。